



物価史にみる建築職人賃金の推移

No. 4

物価史という学問のことから説き起こしたい。

1930年にフランスで創刊間もない雑誌『アナル』が国際物価史研究委員会設立の記事を書いた。このプロジェクトは、米国のロックフェラー財団の資金で、「できるだけ長い期間を対象とした物価の継続的なリスト作成を行う」というもので、メンバーには独・米・仏・奥・英・西の経済学者や歴史家が入っていた。その意図は数理的なアプローチに乏しい伝統的な実証史学を批判し、歴史研究に科学的基礎を与えることであったという。

物価史は経済史学という学問領域に属し、数量経済史の一部である。日本では豊富な資料に恵まれた米価史の研究が先行したが、本格的に行われたのは1960年代以降である。梅村（1961）や佐野（1962）による建築労働者の実質賃金の測定は初期の成果であったとされる。今回は物価史や建築史の知識を参考に、職人賃金の推移をみてみたい。

*

今日、労働者の中でサラリーマンがかなりの数を占めるが、こうした“賃労働”が一般化するのには明治以降である。明治初年における身分制の廃止、土地制度の変革により農民が零細小作農化し、これに旧武士層・手工業者・浮浪人・囚人層を加えて後に賃労働者階級が形成される（隅谷（1955））。だが、建築に関しては、すでに奈良時代から賃労働が行われていた。建築史の渡邊（1956）は、それなりの社会的分化が行われて、賃労働により生計する自由専業工人が存在したかどうかはかなり疑わしいとしながらも、古代から近世までの工匠の賃金について考証している。

*

渡邊（1956）によると、天平年間の石山寺造営工事（762年）の記録分析から、奈良時代の工匠の報酬は、功銭（職種や技能により10～20文）と現物給与としての食料（1日の労働で2升（＝今枡の8合）の米と塩4勺と副食物調味料等）とであった。これは1日の食料の2倍程度に相当するが、これのみでは一家が生活できず、他の家族は班田耕作農民として生計をたてていた過渡期だったようだ。

平安時代になると民間の工人が発達する。この時代も米での支給が多い。東大寺修理工事の記録から、今枡での換算で、「大工6.25升、長5.63升、連5.0升、夫1.88升」（大工、長、連は工匠の職階の違い）が報酬額だった。奈良朝にはほとんど差がなかったが、このころは大工と雇夫で3倍近くの開きである。これは賃労働の本格化を物語る。

中世においては、鎌倉時代の末頃から工匠賃金には再び貨幣が使用されはじめる。14世紀から17世紀に至る400年間は建築の「座」の盛衰時期にもあたる。この間は中央地方、年代上下、職種の如何にかかわらず、工匠の賃金が一定不変であったらしい。一般工匠が100文、大工など工事統制にあたる者はそれに50文の役手間が加えられたのみである。渡邊はこれを「慣例を強固に維持しようとする中世の特徴」（同書）とする。

*

ここで物価史の知見を借りて、数量的に職人賃金の推移を示してみたい。時代は物価史がたどれる資料の関係から江戸中期以降となる。図1～図

3は梅村(1961)のデータと方法を参考に、建築関係の労働者の実質賃金の推移を計算した。表1の歴史資料を基に、名目賃金指数を物価指数で割り実質賃金指数を求め、グラフでは5年移動平均をも示した。なお、基準年や資料が異なるため、各図は独立してみるべきで、数字のリンクはない。

図1は、江戸時代の越後屋呉服店が実際に雇い入れた職人に支払っていた賃金の記録(三井家文書)を元にしたものである。当時の建築労働者全般を捉えたものではないが、連続データとしては物価史研究上も問題が少なく貴重である。同時にこの資料は買い入れた日用品の価格もきめ細かく記録しており、物価変動も捉えられる。

図1補図に示したように、名目賃金指数はほぼ一定の値で1860年頃まで推移する一方、米価の豊凶変動等により物価指数が大きく上下するため、図1の実質賃金指数には変化が見られる。物価が安定していた享和・文化初期(1801-10年)の水準を100とすると、江戸中期までは比較的安定的に推移していたが、物価が騰勢を始めた1820年以降は徐々にそのレベルが落ちていった。

つづいて、図2に示す明治以降は数段の足踏みが見られるが順調に上昇しており、とくに大正か

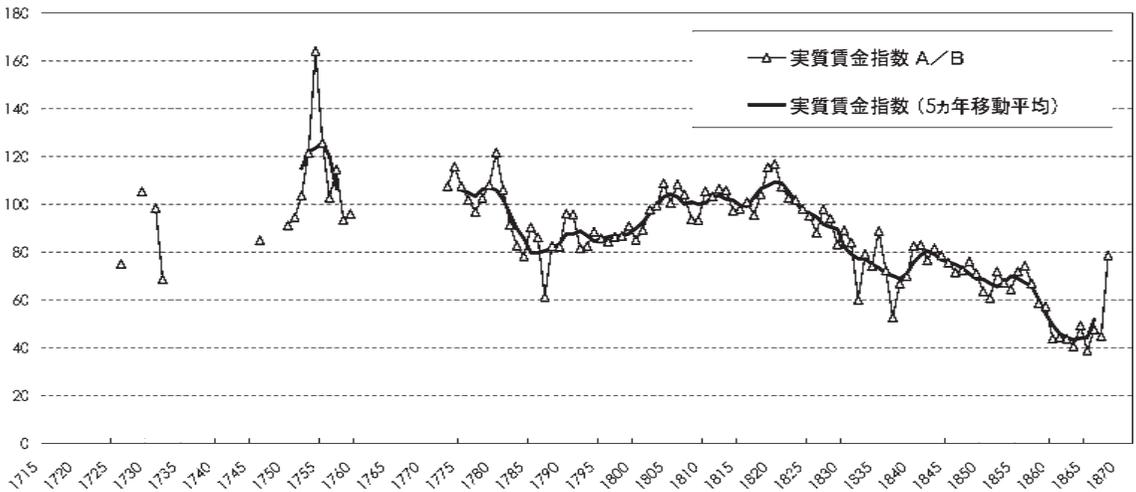
表1 図1～図3の算定根拠

	図1	図2	図3
時代	江戸中期～明治初期	明治中期～昭和30年代	昭和45年～
基準年	1801-10年	1914年	2005年
建築労働者の賃金指数Aの根拠	京都の越後屋呉服店が雇入れ支払った銀匁表示の大工・左官・畳屋の手間を個別に指数化し単純平均。	明治以降は商業会議所調査の5職種加重平均賃金。戦後は労働省の「屋外労働者職種別賃金調査報告」の3～5職種平均賃金。両者系列をリンク。	経済調査会の「積算資料」掲載データで主要11職種の単純平均。近年は公共事業設計労務単価。
小売物価指数Bの根拠	米等11品目の越後屋呉服店の小売価格の加重平均指数	明治以降は別論文推計値。戦後は統計局の東京消費者物価指数	総務省公表の消費者物価指数
文献等	梅村(1961)	梅村(1961)	—

ら昭和初期にかけて職人の実質賃金の水準は大きく伸びた。しかし1930年頃から世界恐慌の影響からか、大幅に下落している。図2の終戦直後、そして続く図3では、バブル崩壊後の1998年までは実質でも下方硬直的といってよいほどに上昇したが、現時点は下落基調の中にある。

*

ところで、図1の範囲外の江戸前期(17世紀)



(注) 梅村(1961)による。詳細は表1を参照のこと(図2, 図3等も同じ)。

図1 江戸中期～明治初年の建築労働者の実質賃金指数の推移(1801-10年の平均=100)

は人口急増の時代だった。奈良時代の人口500万人が16世紀まで徐々に1,200万人に増えたが、17世紀には3,000万人となった。それが新田開発に拍車をかけ、“請負業”の発生にもつながる。物価史的にも、米価の持続的な上昇が確認されるなど、17世紀はインフレの時代だった。

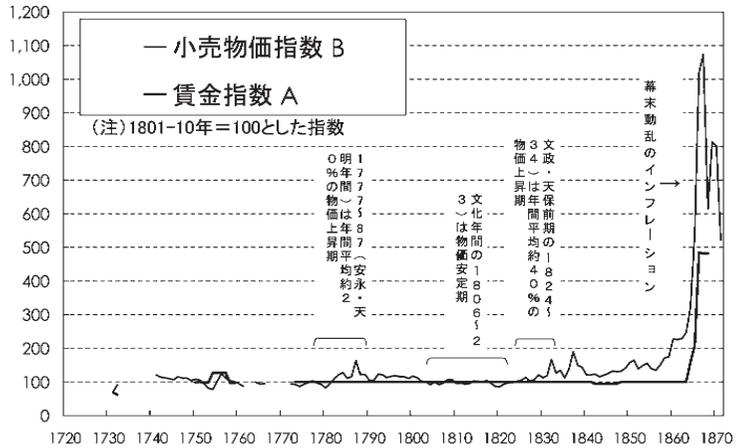
*

以上のように、実質賃金の推移を江戸時代からの長期にわたって観察した。数量的な尺度でもみてもなかなか実感はわからないかもしれないが、断片的な情報から想像力をめぐらす楽しさがある。現在の建築労働者の賃金水準が低いという議論は多い。状況的には1930年代、1820年代と似ているといえるが、それらの時代の労働者はどう乗り越えたのだろうか。長い目で見ると、分かってくることもあるような気がしてくる。

(主席研究員 岩松 準)

<参考文献>

梅村又次「建築業労働者の実質賃金1726-1958年」一橋大



(注) 図中のコメントは物価指数についてのもの。

図1 補図 賃金指数 A と物価指数 B

学経済研究所編・経済研究 Vol.12, No.2, 1961.4, pp.172-176

佐野陽子「建築労働者の実質賃金—1830-1894年」三田学会雑誌 Vol.55, No.11, 1962.11, pp.49-76

隅谷三喜男『日本賃労働史論：明治前期における労働者階級の形成』東大学術叢書 9, 東京大学出版会, 1955.7

原田敏丸・宮本又郎編著『歴史のなかの物価：シンポジウム—前工業化社会の物価と経済政策—』同文館, 1985.10

渡邊保忠『日本建築生産組織に関する研究1959』明現社



図2 明治～昭和戦後の建築労働者の実質賃金指数 (1914年=100)

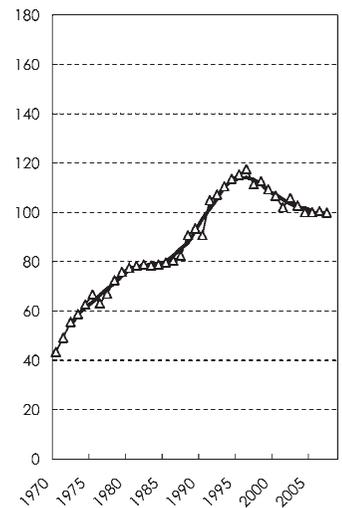


図3 近年の指数 (2005年=100)